

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	喜多 望海
所属機関	名古屋市立大学大学院 医学研究科 放射線医学分野
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	ASTRO's 66th Annual Meeting (第66回米国放射線腫瘍学会)
渡航期間	自 2024年9月28日 至 2024年10月3日
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	Risk Analysis of Radiation Pneumonitis after Stereotactic Body Radiotherapy for Central Non-Small Cell Lung Cancer (中枢性早期肺癌に対する定位放射線治療後の放射線肺炎の予測因子)
<p style="text-align: center;">研究成果 (要約: 800字)</p> <p>私は、2024年9月29日から10月2日にかけてワシントンDCで開催されたASTRO's 66th Annual Meetingに参加し、下記の中枢性早期肺癌に対する定位放射線治療後の放射線肺炎の予測因子について発表致しました。</p> <p>気管支や肺門に近い中枢性の腫瘍に対する肺定位放射線治療後に、放射線肺炎のリスクが上昇することが知られていますが、はっきりとした原因は解明されていません。今回、中枢性腫瘍の治療後に放射線肺炎が多い原因として、気管支の影響が強いという仮説を立て、気管支の照射線量と放射線肺炎の相関関係を調べることに致しました。2004年から2018年まで名古屋市立大学病院で肺定位放射線治療を行ったIA1-IIA期非小細胞肺癌患者を解析し、中枢性腫瘍の79例を対象としました。主要評価項目はグレード2以上の放射線肺炎とし、気管支の線量因子について解析を行いました。グレード2以上の放射線肺炎の4年間の累積発生率は22.5%でした。気管支の線量因子では、V10-V40Gy および D0.1-D5cc がグレード2以上の放射線肺炎の発生と相関していました。気管支および肺の線量因子の中で、グレード2以上の放射線肺炎に対してAUCが0.72を超えたのは気管支の線量因子のみでした。AUCが0.72を超えたパラメータは、気管支 V20Gy (AUC:0.728、閾値:0.41cc)、V15Gy (AUC:0.736、閾値:1.2cc)、V10Gy (AUC:0.723、閾値:1.8cc) でした。中枢性早期肺癌に対する定位放射線治療では、気管支 V15Gy を1.2cc以下にすることが、グレード2以上の放射線肺炎を防ぐための指標となり得ることが示唆されました。</p> <p>本研究発表後に、発表を見てくださった海外の先生より共同研究の提案を頂き、非常に有意義な学会参加となりました。今後も研究活動に邁進して参ります。本学会参加を助成頂いた、がん研究振興財団の皆様にご心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。</p>	

